

ああ眠い。心が項垂れている。落ちた頭のまま、手元のスマホに目を落とす。やりとりの止まったメッセージアプリ、やる気の起きないゲームアプリの数々。ここには何も無い。

スマホから目を上げる。周りには仲間しかいなかった。首を上げて、ぼうつと手元に目を落とす人間の数々。どうにも悲しい気持ちになって、救いを求めて遠くに目をやった。晴れた空をバックに、規則的に設計されたガラス張りの建物群が並ぶ。そのうちの一つ、綺麗に磨かれた窓ガラスに、人間を配る電車が映った。すべらかな表面を音もなく滑る現在地を見ていたら、足元がふわっと浮いて、飛んだ。

神々のあらしい

睡さるごと

は優しい世界。ゆっくり慣れていってくださいね」
そう言って彼はこの先の道を空けた。明るい雰囲気
の街並みが開けて、俺の世界での生活が始まった。

ここに来てから一か月が経った。この世界は最高だ。本当に寝るだけで仕事が済むのだ。夜になったらこの世界の会社に行き、睡眠をとる。翌朝起きたらそれで仕事が終わり、ひたすら自由な時間が待っている。久しく感じていなかった体と心の健康の両立がスタンダードな世界だ。どれ程素晴らしいことだろう。会社の人たちも皆良い人で、すぐに打ち解けることが出来た。仕事場に仲間と集い、仕事が終わったら仲間たちと過ごす。少し退屈なほどの平和な時間が保証されている気がした。
そんな空気が満ちていたのだろうか、誰からともなく、夜更かしをしてみようという案が出た。普段は二十二時から十一時までの間に八時間寝るのが仕事なのだが、その最中に歩いたことは一度もなかった。夜更かしを夜更かしと呼ぶなくなっていた前の世界とは違って、この世界では理想の生活サイクルが現実のものとなっている。そんなこの世界には、最早夜更かしという行為は存在していなかった。その禁じられた恋への憧れが、集団の熱に浮かされ、ついに実行へと移された。

「ようこそ、おめでどうございます」
にこやかな笑顔の男性に迎えられる。一面明るい景色。一様に皆明るい表情。気持ち悪い。
「おめでどうございます。ここは鏡の向こうの世界。ここでの仕事は寝ることだけです。それ以外の時間は自由にして良いんですよ」
唐突に、臆せず話しかけてくる男性。彼は誰だし、ここは何処だし、頭が痛くなりだした。
「あなたはそのトンネルからこの世界にやってきました。あなたはとても頑張ったので、ここにやってきたようですね。おめでどうございます」
寝るのが仕事ってどういうことだ？ 鏡の世界ってなんだ？ そんな楽な世界だともいうのだろうか。
「ああ、突然のことで戸惑っていますよね。ですがここ

当日。まずは小手調べという事で、一人だけが夜更かしをすることになった。一人には俺が名乗り出た。ここに来てから久しく、夜遅く起きていない。自らの選択に

よって夜遅く起きることが出来るという事をこの上ない幸福のように感じて、一番に名乗り出た。

いつものように出社した後、寝に行かず会社を後にする。人のかけた夜の街は血の通わなくなった人体のように、親しみを持っていた街並みが急に別人のように感じた。道をまっすぐに歩く。夜になり、人が減ったことで冷えた風が俺の横を足早に過ぎて、目を冴えさせた。やはりこの時間に起きていると眠くなる。よくこの時間に起きていられたものだ。人間はそこまで丈夫なのか。

「こんばんは、どうされましたか」

一瞬で肝が冷える。ぎこちなく振り返ると、警備員姿の男性が立っていた。何の表情も浮かんでいないその顔がひどく恐ろしく見えた。

「十分な睡眠は義務です。一日八時間は寝てください」

「す、すみません、今から戻ります」

そう嘘をついて足早に去る。声は聞こえない。後ろを振り返ると、彼はそこに立っているだけだった。どうやら問題なかったようだ。

そのまま別の場所へ向かう。今度はどこに行ってみようか。一通りこの街を見て回ろうと思いついたその時、頭上に警報音が鳴り響いた。

「健康的な睡眠は義務です」

「一日八時間は寝てください」

「体と心の健康を保つべきです」

「睡眠は何にも代えがたい重要なものです」

先程の警備員姿の男性が空を飛んでいる。それが四人。全く同じ姿の人間が四人、空を飛んでいる。異常だ。俺は恐ろしくなって駆け出した。けれども相手は空、どこまで逃げようと逃げ切ることとは不可能だ。飛行している警備員が高度を落として迫ってくる。これはもう無理だ。

観念して目を瞑ったが、それでも分かるほどの強い光が発生したのは分かった。

ピピピピピッ

聞き慣れた懐かしい音で目を覚ます。見慣れた天井、見慣れた蛍光灯。見慣れた全てが広がっている。見慣れた全ては一月ぶりだというのにひどく久しぶりに思えた。察する。

戻ってきてしまったのだ。元の世界に。考えていなかった可能性、考えを止めていた可能性が目の前で笑った。鳴り続けるスマホを手にとると、すっかり一月経っている。当たり前のように毎朝早くに設定された目覚ましに目眩がする。ああ。嫌だ。

一か月の間仕事を休んでいたであろうことや、さっきまでいた世界が一体何であったのかということ、その他にも悩むべき事柄は多くあったが、眠さが複雑な思考を遮る。

……帰ってきたくなかった。

一度たつて起こるはずが無かったのだ。分かりきっている事柄だ。

それでも、有りもしない可能性に縋りたくなってしまった。一度は見られた夢。今日も赤い太陽だけが、俺の淡い待望を照らしている。

行きたい。あの向こう側に、もう一度。

電車に乗ってあの場所を通過する度に、ビルの窓に目をやる。何も起こらない。あのビルのすぐ近くまで行ってみる。勿論何も起こらない。当然だ。二度どころか、